

2.5 イスラームの思想

2.5.1 イスラームとは何か

イスラーム Islam : アラビア語で、唯一の神（ ）に絶対的に服従すること
（ ） : 絶対的に服従する者、=イスラームの信者

預言者・使徒ムハンマドの生涯

Muhammad [Mahomet フランス語] (570頃~632)

西暦	年齢	年 譜
570	0歳	アラビア半島の（ ）でクライシュ族の名門ハーシム家に生まれる 誕生前に父を幼児に母を失い、孤児として祖父や叔父に育てられる。
595	25歳	賃金をもらっての羊の世話、商人として隊商（キャラバン）参加。 裕福な未亡人ハディース（40歳）と最初の結婚
610	40歳	ヒラー山の洞窟の中で大天使（ ）により神の啓示を受ける 「誦め」 ⇒使徒、預言者としての自覚
614	44歳	大衆への布教：多神教と偶像崇拝を排撃 ⇒イスラームへの迫害、妨害 「夜の旅（イスラー）と昇天（ミーラージュ）」 ¹
619	49歳	叔父アブータリブとハディースの死
622	52歳	（ ）：聖遷）メッカを逃れ（ ）へ移住 ⇒ イスラム暦（ヒジュラ暦）元年
630	60歳	メッカを無血征服（ ）神殿の偶像を破壊
632	62歳	メッカへ別離の巡礼 メディナへ帰宅後、死亡

イスラームの信仰

神が人間に授けた規範——「聖法」=「イスラム法」=「（ ）」に従って
生きることがイスラーム

シャリーア：神の示す人間の正しい生き方。共同体の成員すべてに等しく適用される規範。人間生活の
全分野に関わる。

儀礼的規範(イバーダート)：浄め、懺悔、礼拝、ザカート、断食、巡礼、葬制など

法的規範(ムアーマラート)：婚姻、離婚、親子関係、相続、奴隷と自由人、契約、売買、誓言、
証言、ワクフ(寄進財産)、訴訟、裁判、非ムスリムの権利と義務、犯罪と刑罰、戦争など
の公・私両法にわたる

（ ） [イスラーム共同体]： シャリーアの理念の地上的表現。神の下した真理を正しく地
上に具現するものとして、正義の行われる理想社会の実現を目指す。

（ ）²： シャリーアの中で示される、六つの信仰と五つの守り行うべき行為。

⇒信仰(イマーン)だけではなく、正しい信仰が**行為**(イバーダート)によって具体的に表
現される必要がある

¹ ある夜、ムハンマドのもとに天使があらわれ、彼の首を裂き、心臓を取り出して洗った。再び心臓が体内
に戻された時、彼の魂は知恵で満たされたという。ムハンマドは天使ジブリールにつれられ、天馬ブーラー
クに乗ってエルサレムに飛び、そこから七天に昇り、アダムやモーセ、イエスに会ったといわれる。

² 六信は10世紀後半、五行は8世紀はじめに成立し、スンニー派の学者がまとめた。

六信

- (神) : 唯一絶対の神への信仰
 「これぞ神にして唯一者、神にして永遠なる者。生まず、生まれず一人として並ぶ者はない」(112:1-4)
 一神教
 「(神は)御心のままにある者を迷いの道に陥れ、また御心のままにある者を正しい道に導き給う」(14:4),
 「天と地の主権は神に属す。誰を赦し、誰を罰するかもすべては御心次第である」(48:14)
- (マラーイカ) : ジブリール (ガブリエル), ミーカール (ミカエル), アズラーイール (死を司る), イスラーフィール (終末のラッパを吹き鳴らす) cf.シャイターン (サタン)
- (キターブ) : 『モーセ五書 (旧約聖書)』『福音書 (新約聖書)』 cf.啓典の民
 啓典中の啓典 = (,) al-Qru'an
 : 「読誦されるもの」「読誦」の意、神がコーランの原本ともいうべき「天に護持されている書板」を天使ガブリエルを通して直接ムハンマドに読み聞かせたもの。ムハンマドに対して神から下された啓示を人々が記憶し、後に 3 代カリフ³, ウスマーンの時に集録された。114 章よりなる。
- (ナービー) : クルアーンには 25 人記載。特にアダム, ノア, アブラハム, モーセ, イエスとムハンマド (最後の預言者) が重要。
- (アーヒラ) : 世界の終末, 未曾有の天変地異の後の最後の審判⇒天国か地獄へ
- (カダル) : 人間には自由意志がなく, 神の絶対的意志によってすべては予定されている (宿命説)

五行

- (シャハーダ) : 礼拝の度カリマを唱える「アッラーの他に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒なり」
- (サラート) : 日の出前, 正午, 午後, 日没, 夜半の 1 日 5 回メッカに方向へ
- (サウム) : イスラム暦 9 月 (ラマダーン月) 日の出から日没まで一切の飲食禁止
- (ザカート) : 救貧税。用途がクルアーンに規定され, 財産に比例して支払い義務
- (ハッジ) : イスラム暦 12 月決められた方式に従ってメッカのカアバ神殿に詣でる

イスラームの分派

- () 派 : 全イスラム教徒の九割以上を占める。スンナ (口伝慣行) に従う人々。
- () 派 : スンナ派のカリフを認めず正統 4 代カリフ, アリーの血統を正統とする。

解答

(アッラー) に絶対的に服従すること, (ムスリム) = イスラームの信者, (メッカ) に生まれる, 大天使 (ジブリール) により神の啓示を受ける, (ヒジュラ : 聖遷), 「イスラム法」 = 「(シャリーア)」に従って生きる, (ウンマ [イスラーム共同体]), (六信五行),
 ◎六信, (神 アッラー), (天使 マラーイカ), (聖典 キターブ), (コーラン, クルアーン), (預言者 ナービー), (来世 アーヒラ), (天命 カダル),
 ◎五行, (信仰告白 シャハーダ), (礼拝 サラート), (断食 サウム), (喜捨 ザカート), (巡礼 ハッジ),
 (スンナ, スンニー) 派, (シーア) 派

³ 神の使徒ムハンマドの代理人・後継者であり, 政治・軍事・司法の最高の責任者

2.5.2 イスラームの使徒ムハンマド

預言者にして神の使徒

ムハンマドとは何者か？ 「イスラームを説いた預言者」「イスラーム教の教祖」日本人の一般的常識でいえば、後者と答える人が多いだろう。しかし、より正しい答えは前者である。「イスラーム」が意味するものは、通常〇〇教という名称で言い表される宗教の概念を大きく超えている。それは、精神のよりどころとしての宗教の枠を超え、個人生活から社会制度に至る、あらゆる側面をカバーする教えであった。いわば全知万能の教えなのである。

しかし、そのすべての源を説いたムハンマドは、神格化されることはない。なぜなら、教えの主体は「神（アッラー）」にあり、ムハンマドは神の御言葉を預かり、仲介する「預言者」にすぎないからである。ムハンマドは自ら「市場を歩き、ものを食べる普通の人間である」と語っている。

6世紀のアラビアに生まれたムハンマドは、神の啓示を受けた「警告者」として人々の前に現れ、「神の使徒」として旧来のアラビアの信仰世界、社会体制のすべてを一変させるという、一大変革を成し遂げる。しかも、その二十数年という短い活動期間に残された啓示が『クルアーン（コーラン）』として、その言行が『ハディース』として、そしてその両者から抽出された規範が「シャリーア（聖法）」として残され、今日に至るイスラームのすべてを規定しているのである。

使徒の誕生

孤児としての幼少期

西暦570年ごろ、メッカのハーシム家のもと、ムハンマドは産声をあげた。

しかし、母アーミナが妊娠2か月のとき、父アブドゥッラーはこの世を去っている。ほかに兄弟姉妹はいなかった。幼少時代のムハンマドは、当時の慣習に則って、高原砂漠の遊牧民のもとで過ごす。これは一種の里子の制度である。岩山に囲まれた谷間に位置し、蒸し暑いメッカを避け、子供を健康に育てる知恵だとされている。

続いて、6歳のときには、母アーミナも亡くしている。ムハンマドは、幼いころから孤児として生きざるを得なかったのである。このことは、寡婦の保護と困窮者の扶助として、後に彼が唱えたイスラームの教えの理念へと昇華していく。

孤児ムハンマドは、ハーシム家の家長である祖父、そしてその後を継いだ叔父のアブー・ターリブのもとに預けられた。当時のメッカでは、近い血縁を有する父系の部族によって、身の安全などを保護する帰属集団が構成されていたのである。ちなみに、ハーシム家は、「最も高貴で、血筋が良く、地位が高かった」とも伝えられている。名門とっていい家柄にあった。

青年期のムハンマドは、賃金をもらって羊の世話をしていたほか、2度にわたって北方シリアのブスラーへの隊商（キャラバン）を経験している。最初は叔父アブー・ターリブのお供として、2度目は自らスポンサーの資金を預かっての交易の旅である。他の同世代の若者同様、商人としてのキャリアを着実に積みつつあった。

自立した商人の気風

従来、イスラームが登場する以前のアラブは、無知を意味する「ジャーヒリーヤ（無明時代）」と呼ばれている。ありていにいえば、遊牧民的価値観が尊ばれていた世界といえよう。つまり、砂漠において限られた富を守り、生存していくうえでの単位となる、部族・血族の掟に従って生きるということである。彼らのアイデンティティは、部族の伝統と血のつながりにあり、外敵に対して死をも恐れぬ精神で立ち向かう姿勢こそが称えられた時代、といわれてきた。

しかし、近年、イスラーム誕生当時のメッカを、商人が活躍する都市文化の特質から探る試みが主流になりつつある。商人の価値観は、部族民の論理とは様相を異にする。通商においては、帰属集団の枠を超えて相手側との対等な取り引きが行われる。そこに契約という観念が発達し、目的の共通化が必要となってくる。当然、情報の交換も行われたであろう。

そこでは、才に長けた個人が富を蓄え、勢力を拡大させることを可能にする。そして、従来の地縁、血縁を基盤とした集団の価値観にかわって、自立した個人の価値観を尊重する気風が生まれてくる。旧来の枠にとらわれない個人の発想は、より普遍的な価値を指向することにもなるであろう。

そして、忘れてはならないことはメッカが商業の拠点だけでなく、信仰の拠点でもあったことである。今も世界から巡礼者を集めるカアバ神殿には、特定部族の信仰の対象であった神像や聖なる石といった類いのものが脈絡もなしに雑多に祀られていたのである。

退廃の都市メッカ

青年時代のムハンマドには、その精練で誠実な性格を物語る二、三のエピソードがあるほかは、特筆すべき出来事はない。ただし、25歳で最初の結婚をしたことは記しておくべきだろう。

相手の名はハディース。ほかならぬ、先にあげた2度目の旅のスポンサーで、当時40歳であったともいわれる富裕の未亡人であった。彼女はムハンマドの評判を聞き、通常の倍の報酬を支払ったという。ムハンマドは見事にそれに応え、大きな利益をあげたのである。さらに、旅先での誠実な態度がハディースの耳に伝わった。彼女はムハンマドを再婚の相手として心に決め、やがて2人は結ばれる。

15歳年上とはいえ、家柄と経済力に恵まれ、かつ優れた人格者であったハディースを妻にできたことは、ムハンマドにとって幸運なことであった。彼ははじめて暖かく、平和な家庭を持ったのである。

一見何の不满もない生活を送っていたムハンマドだったが、彼の目には当時のメッカの状況はどう映ったのだろうか。当時のメッカの社会風潮を伝える、次のような記述がある。

「王様、わたくしどもは無知の民で偶像を崇拜し、死んだ動物の肉を食べ、忌まわしいことを行い、血縁のきずなを破り隣人をそこない、強いものは弱いものをむさぼっています」(イブン・イスハーク『預言者の伝記』より)

話は前後するが、これは初期のイスラム教徒がエチオピアに避難した際に、キリスト教徒の王に向けた言葉である。当時のメッカが、精神的退廃に冒されていた状況を如実に表している言葉ともいえる。メッカは、都市としての発展に伴って、貧富の差が拡大し、旧来の秩序の喪失とモラルの低下が社会問題化していた。イスラムでいう「ジャーヒリーヤ」とはまさにこの状況であった。いわく、「真理の光が届かない闇の世界」である。

王様への言葉は次のように続く。

「わたくしどもがこのような状態にあったとき、神は一人の使徒を遣わし給いました」

異常な状況で下された啓示

最初は、夢のお告げだったという。ムハンマドはあるときから山籠もりを行うようになった。食料を携え、メッカ近郊のヒラー山の洞窟に籠もり、何日もの間瞑想や勤行を続けるというものである。そして40歳のある日、ついに運命の出来事が彼の身にふりかかる。

いつものように洞窟に籠もっていたある夜のことで、うとうとと眠っていたムハンマドは、突如、全身が押しつぶされるような感覚に襲われた。気がつくところに天使ジブリール(ガブリエルのこと)の姿があった。天使はそのままムハンマドに「読め」と命じたのである。

『私は読めません』と言うと、天使は私をつかみ、覆いかぶさり、苦しくなると離し、また『読め』と言った。私が『私は読めません』と言うと、天使はまた私をつかみ、覆いかぶさり、苦しくなると離し、また『読め』と、言われた。また私が『私は読めません』と言うと、天使は三度私をつかみ、覆いかぶさり、苦しくなると離し、『読め。創造をなされた汝の御名において。読め。凝血から人間を創造させた御方。読め。汝の主は最も尊い御方。筆を取る術を教えられた御方。人間にその知らぬことを教えられた』(9章1～5節)と言ったのである。(『預言者伝』より)

まさに異常としかいいようがない体験であった。アッラーの啓示は、天使を通じ、こういう形で下されたのであった。

預言者の自覚

こうして、ムハンマドの人生は急転回する。彼は、有無をいわず神によって選ばれたのである。本人の意志とは一切関わりなく――。

一介の商人にすぎないムハンマドにとって、まさに悪夢であった。何か恐ろしげな妖霊のしわざに違いない。そう感じたムハンマドは、恐れおののき、動悸で胸を高鳴らせながら妻の待つ家に帰った。

家人たちは震える彼の全身を衣でつつみながら、ムハンマドの告白を聞いた。ハディージャは気丈にも「神はあなたを決して辱められません。あなたは親族を大事にし、万人に親切にし、貧者に施してきたではありませんか」と語りかけ彼の気持ちを落ち着かせた。

そして、ハディージャは、いとこにあたる老人、ワラカを連れてきた。ムハンマドに起こった一部始終を聞いたワラカはこう言った。

「それはモーセに降臨したのと同じ『ナームース（啓示伝達の天使、ガブリエル）』である。ああ、もしお前の同胞たちがお前を追放するとき、私が生きていられたら」（『預言者伝』）

ワラカは、当時珍しくキリスト教を信じる人間であった。彼はヘブライ語を書き、聖書をそらんじることでもできた。そのため、それを聖書に記されたものと共通する神の啓示であるとし、それが使徒として逃れられない運命を持つこと、そして、後にこうむるであろう迫害をも預言したのである。

それから1ヶ月後、突然啓示は再開された。ムハンマドが歩いているときに天から声が聞こえ、例の天使が、天地の間の玉座に座していたのである。ムハンマドは驚き、帰宅して「私を包んでくれ」といった。アッラーはそんな彼に再び言葉を下した。

「衣にくるまる者よ、立ち上がり警告せよ。そして汝の主を讃えよ」（74章1～2節）

それ以降、啓示は激しく、矢継ぎ早に下されていく。西暦610年のことであった。

ムハンマドは使徒として神の言葉を伝える活動を開始する。とはいえ、当初の3年間は秘密裏の布教にとどまった。公然と部族内の伝統に挑戦するつもりも、新しい宗教を設立するつもりもなかった。しかし、彼の下には、少しずつ人が集ようになる。最初の信徒は、妻のハーディージャであった。そして、彼の従兄弟でまだ子供であったアリーと、彼によって奴隷の身を解かれたザイドが続いた。さらに成人の自由人では、ムハンマドの友人で富裕な商人でもあり、常に彼の右腕として使えたアブー・バクルが入信し、身分や血縁にとらわれない新しい信仰集団が誕生した。

入信者がおおよそ30名を超えてから、アッラーの啓示はムハンマドに公の布教を促すようになっていった。そして、アッラーに命じられるまま、ムハンマドはメッカの多くの人々が信じる多神教と偶像崇拝を断固として排撃した。その結果、イスラームに対する本格的な迫害や妨害が始まった。

そのころ、ムハンマドに「夜の旅と昇天」という奇蹟が起こったとされる。ある夜、ムハンマドのもとに天使があらわれ、彼の首を裂き、心臓を取り出して洗った。再び心臓が体内に戻された時、彼の魂は知恵で満たされたという。ムハンマドは天使ジブリールにつれられ、天馬ブーラクに乗ってエルサレムに飛び、そこから七日に昇り*、アダムやモーセ、イエスに会ったといわれる。

神の召命から10年目の619年叔父のアブー・ターリブと妻ハーディージャが亡くなる。アブー・ターリブは入信しなかったものの、ムハンマドをハーシム家の一員として保護しつづけていた。その保護を失い、ムハンマド自身の身の安全も危うくなったため、メッカの北にある商業都市ヤスリブ（後にメディナ）へ移住する。これをヒジュラ（聖遷）という。この年、西暦622年が後にイスラーム暦元年となるのは、メディナにイスラームの国家を成立させたためである。イスラーム暦はヒジュラ暦とも言われ、月の運行に基づく太陰暦なので、我々のつかう暦よりも1年が11日短い。西暦（キリスト教暦）2001年はヒジュラ暦の1421年にあたる。

* 現在ムハンマドが昇天したとされる場所は「岩のドーム」とであるとされるが、同じ場所がユダヤ教ではイスラエルの祖アブラハムが息子イサクを神のいけにえにした場所であると考えられている。

2.5.3 イスラームの基礎知識

イスラームの食事

「神はただおまえたちに、死骸と血と豚肉、および神以外の者の名によって屠（ほふ）られたものを禁じたもう。」（『クルアーン』2章173節）

—— どうしても食べなければならない状況や知らなかった場合を除いての食事のタブー

酒・ギャンブルの禁止

「信ずる人々よ、酒、賭け矢、偶像、矢占いは、どれもいとうべきものであり、サタンのわざである。それゆえ、これを避けよ。そうすれば、お前たちはおそらく栄えるであろう。」（『クルアーン』5章90節）

ムスリムの生活時間

シュグル：仕事をする時間、労働は神からの罰であると考え

ラブ：遊びの時間、子供のするものとされ、軽視されている

ラーハ：くつろぎの時間、休息、礼拝、瞑想、家族や友人と楽しく過ごす、詩を作ったり、歌を歌ったり、旅をしたりするもっとも大切な時間

—— アラブ世界では午後2時になるとラーハを楽しむために公共機関や企業の窓口が閉まる

女性の保護と隔離

「女子の信者にはこう言え『目を伏せて隠し所を守り、露出している部分のほかは、わが身の飾りとなる所をあらわしてはならない。顔をおいを胸元までたらせ。自分の夫、親、夫の親、自分の子、夫の子、自分の兄弟、兄弟の子、姉妹の子、身内の女、あるいは自分の右手が所有するもの、あるいは欲望をもたない男の従者、あるいは女の隠し所について知識のない幼児、以上の者を除いて、わが身の飾りとなる所をあらわしてはならない。』」（『クルアーン』（24章31節）

—— 女性は夫や家族以外の男性には体や顔を見せるべきではないとされ、戒律の厳しい国では外出の際も黒いベールで体を覆わなければならない。

結婚 —— 一夫多妻制について

「もし、おまえたちが孤児を公正にあつかいかねることを心配するなら、気に入った女を二人なり三人なり、あるいは四人なり娶（めと）れ。もし妻を公平にあつかいかねることを心配するなら、一人だけを、あるいは自分の右手が所有するもの（女奴隷）を娶れ。」

『クルアーン』（4章3節）

—— アラブ世界では血の純潔を尊び、男女交際はいとこ同士以外禁止、この禁止を破るものは一族の恥とされる。結婚の際は親が大きな権限を持つ。



カーハ聖殿(中央)と、礼拝する回礼者たち